

社会科教育

奈良県小学校教科等研究会
社 会 科 部 会
第 79 号

見方・考え方を働かせた社会科教育

奈良県小学校教科等研究会社会科部会

部会長 北野 博康



北野社会科部会長

研究主題は、まさに新しい時代を切り拓いていく主権者としての社会への参画していく力を育てることをねらいとしています。

二 新学習指導要領が示すキーワード

学校現場では、いよいよ新学習指導要領の完全実施を来年度にかけていることと思います。新学習指導要領が示すいくつかのキーワードの中のひとつが「主体的・対話的で深い学び」です。これまで本研究会では、

「主体的・対話的な学習スタイルで深い学び」

「主体的な学習につながる」を指してきました。

① 主体的な学習につながる「？」(はてな)が生まれる資料の提示や体験的な活動。

② そうした「？」から生まれた学習問題に対して予想を立て、それを検証するために見通しをもった調べ活動。

③ 調べ活動から見えてきた社会的事象からその社会的意味を考えるねり合いの設定。

④ それを受けて自己決定や社会に提案できる場面の設定。など、問題解決的な学習課程を工夫してきました。

様々な学習場面で自己対話したり、自分の考えをもとにしてグループやクラス全体での話し合い活動を取り入れたりしながら、自分の考えを深化・統合させたり、変容させたりしてきました。正に新学習指導要領で求められている学習スタイルなのです。

さらに、今回の学習指導要領の中には、もう一つ重要なキーワードがあります。それが各教科の特質を踏まえた「見方・考え方を働かせること」です。総則に「各教科の特質に応じた見方・考え方を働かせながら、知識を相互に関連付けて、より深く理解したり、情報を精査して考えを掲載したり、問題を見出して解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう学習の過程を重視すること」と示されています。この「見方・考え方」は、三つの

三 おわりに

令和の時代になって初めての研究会大会、第六十六回奈良県小学校社会科研究会を奈良市立鼓阪北小学校において開催いたします。会場校の皆様には、大会に向け、授業を中心に様々なご準備をいただいております。本研究会にご参加の皆様には、公開していただく授業から鼓阪北小学校でのこれまでの研究成果を学び損ねるとともに各分科会での協議に活発なご意見をいただき、今大会が実り多きものとなることを願っております。奈良県社会科教育がより一層発展し、子どもたちの学びがさらに豊かなものになりますよう今後とも皆様のご支援・ご協力をよろしくお願い申し上げます。

「見方・考え方を働かせながら資質・能力を相互に結びつけていきます。社会科では、「社会的事象を、位置や空間的な広がり、時期や時間の経過、事象や人々の相互関係に着目してとらえ、比較・分類したり、総合したり、地域

奈良県小学校教科等研究会社会科部会

平成三十一年度冬季研究大会

学年別分科会

平成三十一年二月十九日 奈良県立教育研究所

第3学年部会

「店ではたらく人」

校区にスーパーマーケット

の無い地域

奈良市立飛鳥小学校

教諭 前田 明日香

【実践発表】

本実践では、販売の仕事のうち、主にスーパーマーケット(スーパー)とコンビニを取り上げた。その際、消費者はどのようなお店を利用しているのか、お店はどのような工夫を行っているのかなど常に疑問をもち、それを探求できるように取り組んだ。その疑問解決のために、スーパーとコンビニに見学に行き、調査を行った。そして、販売側は消費者の多様な願いから、売り上げを高めようと工夫を行っていることを理解し、自分たちの生活とのつながりについて考えることができると考えた。

本校区に唯一あったスーパーが昨年度閉店し、親しみのある店が無くなったことで、家庭では新たに次の店選びをするタイミングであり、販売の仕事を感じ、子ども達が調査できるのではないかと考えた。また、家庭で利用する理由を考え、消

費者の買い物の工夫や販売者の工夫について気づけるのではないかと考えた。

本校区にスーパーが無い隣、校区の昔ながらのスーパーに見学へ行った。子ども達からは「次はこんなことを調べたい」「なぜ、こんな工夫をしているのかな」など積極的に学習に取り組む姿が見られた。見学後は、画用紙に付箋をはり店の工夫を整理させた。その際に見つけた工夫を整理し、その工夫が消費者にとってどんな利点があるのかも合わせて考えさせた。

「ねり合い」は消費者の立場にたち「買い物の決め手は○○だ」というテーマで話し合った。「しらべる」段階で調べた工夫を「品質」「値段」「サービス」「商品の多さ」「並べ方」に分類し、このポイントの中から自分の考える買い物の決め手の一つを選び、説明できるようにした。「ねり合い」を通して、買い物の決め手には「安く買いたい」「おいしいものを買いたい」「たくさんの商品から選びたい」等、消費者の願いがあり、消費者のニーズにあった店を選んでいることに気づけた。販売者側は、消費者に店に来てもらうために工夫していることに気づき、消費者と販売者が相互に関係していることに気づけた。しかし、

この「ねり合い」では、意見を質問しあい、反論するなど活発にできなかった。評価は、単元を通して振り返りを書き、見学を通してまとめた図表によって評価した。見学して見つけた工夫は、消費者にとつてどんな利点があるかも関連づけて書かせることで、販売者側は消費者の多様な願いを踏まえ売り上げを高めるよう工夫していることに気づけた。

【研究討議】

子ども達を見学に行かせる前に、どのようなところを見学するかを確認させることで、見る視点をはっきりさせた。↓コンビニとスーパーを見学すると双方の違いが見つけられることに考えがいき、子どもの視点が広がりました。

・新学習指導要領を意識した実践だったと思う。
①言葉が混在している。5つの決め手は、視点ではない。スーパーの工夫や努力、サービスなど：視点。視点≠決め手ではない。視点・決め手等、様々な言葉が混在してしまっている。子ども達からの事実(値段・新鮮さ)を教師がカテゴライズすることで、それが視点になる。子ども達の消費実態を抑えて、見学に行かせることで、子ども達の見学の視点になる。教師から発信する必要がなくなる。
②多角的な見方の実践であった。付箋に色をつけたのは、場所による色分け。せつかく色分けして付箋を使うのだから、今後の学習に使えるようにしたほうがよい。

この「ねり合い」では、意見を質問しあい、反論するなど活発にできなかった。評価は、単元を通して振り返りを書き、見学を通してまとめた図表によって評価した。見学して見つけた工夫は、消費者にとつてどんな利点があるかも関連づけて書かせることで、販売者側は消費者の多様な願いを踏まえ売り上げを高めるよう工夫していることに気づけた。

④校区にスーパーがない：校区の特徴
どんな学習を行っていくのか、校区の特徴・児童の実態を踏まえてつくる。

校区が一番身近な地域だと指導者は思いがちだが、生活圏がどこまでか、どこで買い物するかは、きちんと調べなければならぬ。

⑤店のランキングをするのが、この学習ではない。それぞれのお店の良さを見つける学習である。それぞれのお店に、それぞれの良さがある。

・3年生の社会科で大事にすべきことは、働く人の願い、買う人の願い、そこに関わる人々の願いを大事にすることが大切。

・5年生の産業の学習ではない。

・閉店した理由は何なのか。スーパーも大変だという話をしても校区の実態としてあってもよかつたのではないか。

・スーパー：自分の店という思い、願いが伝わりづらい。

・個人商店：店の人の願い。地域の実態を踏まえての工夫が見えやすい。

・個人商店を見学すると、店の人の願いが伝わりやすい。

・買い物の決め手の一つにしようなのは、なかなか難しい。決め手は一つではないのではないから、ねり合いが盛り上がりなかつたのではないか。↓決め手の一つにさせることで、視点を焦点化できる。友達の話聞くことで、自分とは違った見方・考え方に傾聴しても良いし、違ってもよい。どちらが大切でも良い。いろいろある中で、何が一番大事かという問いをする

子ども達を見学に行かせる前に、どのようなところを見学するかを確認させることで、見る視点をはっきりさせた。↓コンビニとスーパーを見学すると双方の違いが見つけられることに考えがいき、子どもの視点が広がりました。



分科会での提案の様子

ことで、子ども達は思考・判断をする。

・付箋の使い方について子どもから出てきた意見。子どもが見つけた社会的現象(お肉の温度はマイナス十六度など)。

しかし、それぞれの現象には意味がある。教師は子ども達が見つけてきた現象を整理する必要があり、整理することで、現象と意味を繋げる必要がある。

【指導助言】

大和郡山市立筒井小学校

教頭 木村 栄一先生

【成果】

・3年生は見学が大好き。子ども達が、スーパーで働いている人の姿を見ることが、様々な発見がある。それをコンビニ・スーパーの両方を見学することで、比較することができた。

・新学習指導要領にのっとり新しい取り組みであった。

【課題】

・旧と新しい学習指導要領の違いを理解し、新指導要領の3つの視点を大切にしなければならぬ。知識の構造図ではア(イ)イ(イ)で片付けてはならない。

きちんと書く必要がある。
 ・消費者の願いとして家族への聞き取りを行うことで、見学の視点をはっきりさせてから、見学に行かせた方がよかったのではないかと。

・見学の際にお客さんへのインタビューやアンケートを行うことで、客観的な資料ができる。客観的な資料があると、更に学習が深まるのではないだろうか。
 ・この単元では、国旗も少し取り扱わなければならない。地図帳の使い方を合わせて教えると共に学習が深まったのではないだろうか。

・本単元は、子ども達にとって学習することが楽しい単元である。と同時に、まとめ方が難しい単元でもある。
 (五条小学校 上田 智基)

第4学年部会

「地域の発展に尽くした人々」
 西光万吉と全国水平社創立大会

御所市立大正小学校
 教諭 宮城 修斗

【本実践における提案】

本実践は、御所市出身の西光万吉を取り上げたものである。学生時代に様々な差別を受けた西光万吉の努力や願いにより、社会が変革していった様子を学んでほしいと考えた。
 「みつめる」では、白地図に水平社があった都道府県に色を塗り、関東から九州まで三十三都府県に水平社が存在していることに気づかせた。西光万吉について知っていることを出し合い、

学習問題を「西光万吉は、どのようなことをした人なのだろうか。」とした。
 「しらべる」では、西光万吉の水平社創立までの活動や当時の時代背景を学習した。また、西光万吉に詳しい方からお話を聞いた。

「ふかめる」では、『中外日報』の「七百人」という数字を出して、「全国水平社創立大会の参加者は、多いか少ないか」をねり合いのテーマとした。当時の時代背景を考えて「多かった」という立場や、岡崎公会堂の収容人数に着目して「少なかった」という立場に分かれた。この学習を通して、当時の人々の葛藤を感じ取ったり、当時の人々の不安を感じ取ったりすることができた。

「ひろげる」では、新聞を作って校内に掲示した。この学習を通して、自分事として考え、西光万吉の苦みや功績を感じ取ることもできた。

【研究討議】

・子どもたちの意見が変わったのは、差別の現実の厳しさに気づいてくれたのではないかと。学習を進めていく中で、自分事としてとらえられるのは良かった。
 ・ねり合いについては、当時の差別は厳しく西光万吉達は頑張った、ということを意識させるような声掛けがあれば、より深まったのではないかと。
 ・ワークシートの形式が児童の考えの変容が見られるので、良かった。
 ・授業当日は、どこに落ち着いたのか。



分科会での提案の様子

↓活発な話し合いにはならなかった。意見の発表会になってしまった。自分がどう考えるか、根拠をもつことが大切である。
 ・学習を進める中での工夫は、
 ↓歴史分野に地理的要素を入れたり西光万吉の描いた絵を紹介する本を教室に置いたりした。

【指導助言】

五条市立阿太小学校
 教頭 植田 辰哉先生

・授業を組み立てる時には、仮説の見える化をし、中心概念に迫っていく目標があつて、指導・評価と一体化されて授業づくりをするので、先人の何を通して学ぶのか、をはっきりさせることが大切である。
 ・単元の導入で児童の疑問や気づきを大切にしながら、問いを育てていた。新学習指導要領では時間や空間・相互関係で捉えるという改定のポイントがあり、日本地図を使っているのは、知識の質を高めるものになっていた。
 ・資料を活用することで、高学年の「多角的に考える」ことを見据えた授業になったのではないかと。

いだろうか。西光万吉さんに詳しい方に聞いたことで、学びに向かう力、人間性が育まれた。
 ・ねり合いでは、二極化して、わかりやすくしていくというものは中学年にとつては大切である。立場・範囲・根拠・視座・根拠をもって、その事象を見つめる俯瞰力、というのが大切であり、板書やワークシートで整理していくことが必要である。
 ・人権教育にも通じる授業であった。
 (二上小学校 堀江 貴文)

第5学年部会

「これからの食料生産とわたしたち」
 —持続可能な社会につながる平城つ子のフード・アクション—

奈良市立平城小学校
 教諭 新宮 清

【本実践における提案】

本実践は、「フード・アクション・ニッポン」を教材とし、奈良市農政課、さんき環境館と共同研究を行った。
 「みつめる」や「しらべる」では、「平城地域にどれくらい耕作放棄地があるのか」という学習問題をつくり、平城校区耕作放棄地マップを作成した。また、ゲストティーチャーを招聘し、耕作放棄地を多角的に学んだ。
 「ふかめる」では、児童にもできることがあるということからねり合いのテーマを二つ設定した。「フードアクション」に込

められた意味」をねり合い、「地産地消がつくる未来とは」とのねり合いへとつなげていった。
 「ひろげる」では、総合との共同学習で、地域のフードフェスタに参加し、「これからの私」の新聞を作成した。学習を通して、耕作放棄地への考えが深まり、地域社会へ影響を与えた。

【研究討議】

・ゲストティーチャーとの意見の調整はどのようにしたのか。↓「こういう問いをつくりたい。」等を伝え、教材や授業を頼んだ。
 ・耕作放棄地と多面的機能の中で何を理解させたかったのか。
 ↓農業の多面的機能から地産地消について理解させたかった。
 ・耕作放棄地を減らすことやそれ以外の取組を学習することで深い学びになる。
 ・五年の研究仮設として、国から地域、地域から国の学習をしていかなければならない。

【指導助言】

桜井市立桜井小学校
 教頭 大矢根 祐子先生
 今回の実践は、地域に目を向けた実践だった。地域の方とコラボして学習問題を設定した。最終目的として、耕作放棄地から食料生産もつていきたい。教材開発では、米作りの体験学習をすることによって自分事としてとらえることができ、主体的な学びにつながった。
 しらべる段階で「農業の多面的機能をしり」でさまざまな知識を入れておくとよかった。ねり合いで、自分の考えが友達の意

見をもとに変容してくる。児童の考えを揺さぶる問いや、対立意見があればもつとよかった。評価については、単元のねらいを教師が把握して設定していた。それを達成できるような準備ができていた。子ども達が問いをつないで中心概念に向かえた。五年生の社会は、自分事として捉え、今後自分たちはどのような生き方をしていけばよいかを考えていかなければならない。今回の実践は子ども達の学習が大人を動かした実践になった。(五条小学校 吉村 真二)

第6学年部会

「新しい日本へのあゆみ」
「東京オリンピック」から
戦後の日本を考える
過去から未来へ
川西町立川西小学校
教諭 高橋 良仁

「本実践における提案」

本実践では、研究仮説を次のように設定した。「戦後の取り組みについて興味・関心を持ち、その時代を生きた人々の営みや思いについて考え、ねり合うことで、国民生活が向上し、国際社会の中で重要な役割を果たしたことを理解できる。そして、東京オリンピックの学びを通して、将来、自分たちにできる具体的な活動を考えることで、よりよい社会の参画に関わろうとする児童が育つ。」
ねり合いのテーマとして「日本国民はどのような思いで東京オリンピックを開催したのだら

うか」と設定し、外交・経済・平和の三つの視点を関連させて考えるようにしたことで、多面的に迫ることができた。
また、調べ学習ではジグソー法を取り入れたことで、児童が課題に対してより主体的に取り組めるようにした。

「研究討議」

単元の初期の段階で、外交・経済・平和という三つの視点に絞って迫っていたので、もう少し幅を広げ、調べていくことで、より複数の資料から得た知識をもとにねり合いのテーマを深めると、さらに発展的な見方ができたのではないかと考えた。
ジグソー法を活用したことで児童がより主体的・協働的に取り組み、自分たちで調べ出した内容に自信をもって発表することができていた。一方で、具体的な知識の抜け落ちや、グループによっては調べた内容に深淺の差があったことも見られたので、授業者の支援の仕方も今後の課題であると考える。



分科会での提案の様子

日本経済が大きく変化した部分でもあるので、切り口としては大変意義があると感じた。しかし、若い世代の教員は当時の様子を肌で感じていない分、資料に頼ることになるため、どのような資料を提示するかを吟味する必要はある。

「指導助言」

桜井市立城島小学校
教頭 半田 孝先生
・本単元展開において、東京オリンピックを取り上げたことは、児童にとってもインパクトがあり、いい教材であった。ただ、東京オリンピックについての学習で終わるのではなく、東京オリンピックを通して日本経済や外交関係が戦後どのように進んでいったのかを捉えることが大切であり、本実践ではそれがジグソー法を活用して丁寧に取り組まれていた。

・社会科学習の中でジグソー法を取り入れることについては、個々の学びを、クラスの学びとしてつなげていくという意味では非常に有効であると考えられる。授業者の「学ばせたい、子どもに気づいてほしい」思いをしっかり持ち、それを踏まえた上でさらに子どもが調べてきたことを持ち寄って、学びを広げていくとより発展していくだろう。
・「ひろげる」で現代課題である領土問題を取り上げたことは良い。歴史学習を学んできたからこそ、社会の仕組みを捉えた上で「自分だったら」という視点で主体的に考えられる児童になしてほしい。
(平群北小学校 中澤 哲也)



学習の様子

社会科学診断テストの活用について

社会科学診断テストの継続実施を重ねること五十八回となりました。今までも結果を分析し、社会科学の学習指導上の課題を見出し、その改善の方策を考えてきました。

昨年度の診断テストから児童が取り組みやすくするために、A3テスト用紙に変更しました。昨年度の診断テストの分析から、基礎・基本の問題は正答率が高いが、思考・判断・表現の正答率は低い。さらに学年が上がるにつれ正答率は低くなっている。

・知識・理解の問題では、奈良県の位置の正答率は九割弱と近年で最も低く、他の都道府県も合わせて、日頃からの地図帳の使い方・活用が大切である。
・技能問題の結果から見えてくるものは、資料を読みとる力が弱いことが考えられる。

指導において意図した資料の提示や活用力を高める指導をして、社会科学として必要な技能の育成していくことが大切だと考える。

グラフ・資料の指導

○表題・縦軸・横軸・数値を確認する
○増えている・減っているなど大まかな傾向を理解させる。急激に変化しているところなど局所的な変化もおさえない。
○「疑問を見つめる」ということに慣れていないと考えられる。資料についての読みとりでは、「わかったこと」だけでなく「わからなかったこと」「不思議に思ったこと」など、日常的に児童に見つけさせることで、問題発見力は身につけていくと考える。

◆県小社研ホームページから診断テスト報告書をご覧ください

このような指導提案や各学年の分析など詳しく報告書にまとめています。

報告書は、一昨年度より、活用していただきやすいように県小社研のホームページにアップしております。二月に行う冬季研究大会でも詳しく報告しております。

この報告書が多くの学校で活用いただき、社会科学の授業がさらに充実・発展していくことを願っております。

(<http://kenshaken.web.fc2.com>)